

関東学院に来たるべき改革を導く

それぞれの展望

2013年12月19日、規矩大義教授が関東学院大学の新しい学長に就任しました。50歳という若い学長です。どんな思いを持ち、この新たな職に臨むのかを伺いました。



関東学院大学 学長
規矩 大義

1963年生まれ、兵庫県出身。九州工業大学大学院修了。博士(工学)。横浜国立大学助手、佐藤工業(株)中央技術研究所において、研究者として活躍。2002年より関東学院大学 工学部土木工学科助教授に。専門分野は地盤防災工学。2013年から理工学部長を務め、2013年12月19日、関東学院大学 学長に就任。

教員、職員が一丸となって学生と向き合い、教育に携わる。それが学生、そして関東学院の力に。

関東学院大学の学長に就任して以来、この学校には変えていかなければならない「ハード」と、高めていかなければいけない「ソフト」があると感じています。ハードとは、つまり気持ち

のことも、学生を支える私たち教職員が、さらに熱い気持ちを持ちながら学生に接することで、より質の高い教育ができる

と信じているからです。気持ちが変れば、行動も変わるはず。行動が変われば習慣となり、未来も変わります。

「社会人として、どこに出しても誇れる学生を輩出したい」という気持ちですが、教育者としての原点ではないでしょうか。その思いを高めていくことが、学長である私の仕事だと感じています。学生たちに熱い気持ちを伝えられる教職員がいる学校が、大学の理想の姿だと思っています。

私は学生時代、決して褒められた学生ではなかったのですが、勉強は後回しでした。おかげで人より少し長い学生生活を過ごしましたが、大学は大好きでした。当時の恩師をはじめ、学校も私をときに厳しく、ときに暖かく教育してくれましたし、自分が成長していく何かを感じさせてくれました。いいものを貰った」という学生時代でした。この経験があったから、研究を教育に生かすことができる

から大学教員に転じました。ですから学院に採用が決定したときは飛び上がるほど嬉しかったですね。

私にとって教育や学校とは「自分が何かを伝えることで人の変化や成長に役立てるフィールド」と考えているんです。責任ある職場ですが、この責任

ある環境を私は教員としてありがたく享受していますし、教育に関わるすべての人がもつこの仕事を楽しむべきだと思っています。

「学校での教育は教育者だけの務め」と考えておられる方もいるかもしれませんが、私はもっと広く、学生たちと接する機会のある皆さんに「教育」に参加していただきたい、と思っています。そしてそう思ってくれる教職員が関東学院には沢山います。学生たちに変化や成長をもたらすきっかけはさまざまです。何がフックになるかわかりませんが、私の場合、変化や成長の機会

をくれたのは恩師や研究室でしたが、決してそれだけではありません。先輩や友人、時には後輩かもしれませんし、いつでも近くにいるくれた職員であったり、もちろん卒業生やご家族の方々も大きな機会を与えてくれる存在です。そんなきっかけを、学内にも、その周囲にもたくさん用意しておきたいのです。学生たちに寄り添うハードを

持った教職員が一丸となり、学校のハード面を整えていく。そして卒業生やご家族の方々、関係者の皆さんにはそれを支えるサポーターになっていただきたい。なぜなら、学生を取り巻く人たちは、学生たちの応援団だからという思いがあるからです。

学生時代は人生の大切な時期

私は大学に入学して、土木工学を専攻しました。入学して最初の授業で「土木の仕事とは、自然に對峙し、物を作り、人を動かす、お金を扱う仕事である。しかし、その先に社会があることを忘れるな」と言われました。実直であり清廉であることに加えて、公共心を持つことが社会での生活において大切なファクターだと思ふようになりました。関東学院の校訓である「人になれ 奉仕せよ」という言葉は、この公共心につながるものだと感じています。

大学で過ごす4年間は、人生の中でも極めて重要な期間です。それは、ただ単に「学ぶ」というだけではなく、大切な人との出会いもあるでしょうし、地域や社会との繋がりを通して人生の方向性を定めたり、自身の価値観を確立する期間であると思うからです。この間に自分自身の核となる思考、すなわちコアを育てることができれば、その先の社会でも頑張れるし、生きる楽

しさもまた、見出せるようになる

信じています。私は、大学を卒業して既に20年以上も経ちますが、現在も大学時代の恩師や同窓生たちとの関係は続いていますし、今でもそこから輪が広がっています。それは私が大学時代に大切な人たちと出会えた証であり、コアが作られた時期であった証でもあります。学生たちにもこれからの人生に続く人間関係を構築してほしいと思いますし、その人間関係のなかに私たちも入れてほしいと願っています。

最近の学生と接していると、自分の周囲の人との関係や距離感に対してどこか臆病ですが、一方で、自分自身の役割を実感したがついているように感じます。学生たちには「その実感がほしいなら、自分がいま何をしたいのか、何をしてあげられるのか自問しよう」と伝えたい。自分のなかで「誰かの役に立っている」という気持ちが生み出されるだけで、行動の意味づけが変わってくるはずですから。

解決できる力をもに育む

昨今の教育業界には、学生にグローバルな感覚を身につけさせようという動きがあります。社会に出られた方々は、「うわべのテクニクだけを覚えても、厳しい社会を渡っていくことは難しい」と実感されているはずですし、実際にそのとおりです。世界を知ることが重要ですが、そこに求められるも

のは、自分の行動と言葉で、解決できる道筋をつけられること、と考えています。この力があれば、世界のどこにいても問題に立ち向かっていくことができるからです。そしてその多くは、学生時代に培われる力、これもまた大きなコアだと思っています。

これからも卒業生の皆さんが「私の母校だ!」と自慢できるようなコンテンツを増やしたいと思っています。また、若い卒業生がどんどん社会に出ていきますので、どうぞ暖かく、厳しく受け入れてください。いまの若い世代は言葉足らずと言われることも多いので、決して考えていないわけではないのです。私はバブル時代に学生でしたが、あの右肩上がりの時代の学生より、いまの学生の方が、よほど真剣に考えていて、一所懸命です。大学の4年間で

体得したものが、社会に出たときのベースとなります。皆さんには、是非、熱いハードを学生たちにつづけていただければと願っています。



学院のこんな人、あんな人

関東学院の生徒や卒業生、先生方にスポットを当て、紹介します。さて、あなたはこの人を知っていますか？

英語は、これまで努力してきた自分自身の財産

昨秋開催された、第5回関東学院英語コミュニケーションコンテストで中学団体部門1位に輝いた、丸川謙太さん率いる関東学院中学校3年生グループ。英語をこよなく愛する丸川さんは、2012年の同コンテスト個人部門で、すでにスピーチを経験していますが、今回は団体部門からの出場でした。

「先生からのメンバーを推薦されたとき、これは無敵だなと思いましたが(笑)。ほんとに英語が達人な人たちばかりだったんです」。

これからのグローバル社会で必要とされるのは、英語で意思疎通が図れること。そのための取り組みとして、関東学院の英語コミュニケーションコンテストは2009年に始まりました。

「授業で先生に説明していただいたことを覚えて、文法の仕組みを理解していけば、普段のテストはこなせると思っています。でもこのコンテストは、それぞれのキャラクターが

出ないと、観客の心に届きません。

たとえ文法のおかしな箇所があっても、英語を必死で伝えようとすれば、その気持ちはお客さんに必ず伝わるんじゃないかな」。

丸川さんは関東学院の英語教育に魅力を感じ、関東学院中学校を選んだそうです。幼少時代をアメリカで過ごされたお母様からの助言をもとに、中学進学以前から英語を学び、英語検定にも挑戦しました。

「でも実際に入学すると、やっぱり自分よりも英語ができる人がいっぱいいました。コンテストと一緒に出場したメンバーも、今の中学生の平均的な語学力を遥かに上回っていると思います」。

そんな丸川さんに普段の勉強法を尋ねると、「正攻法に勝る勉強法はありません。単語を覚えないなら、何回も書いて覚えるしかない。積み重ねこそが実力になる」と、まっすぐな答え。

「高校生になっても、またこのコン

テストに出場したいですね。自分の英語力に磨きをかけたいです。将来の夢ですか？やはり英語を使う仕事をしてみたいです。英語は、自分自身の財産。それをフルに活用できる仕事にできれば、それ以上に嬉しいことはないです」。



第5回関東学院英語コミュニケーションコンテスト・中学団体部門1位のメンバー。左から、成岡翼さん、井上茉莉さん、丸川謙太さん、松原杏奈さん、顧逸星さん、磯祐輝さん。



関東学院中学校3年生

丸川 謙太

個人スピーチで参加したときよりも、今回の方が楽しかった、と丸川さん。

「勝因はメンバー全員の英語力と演技力。それが見事にマッチして、この成績を導き出したと思います。気持ちをひとつにしなければ、決して賞は獲れませんが、機会があれば、留学も経験してみたいと、将来をしっかりと見つめています」。

関東学院六浦中学校・高等学校 教諭
田澤 由紀子

高校時代はまるで英語ができなかったという田澤先生が、本格的に勉強を始めたのは20歳を過ぎてから。

「高校時代の恩師に会って、英語教諭になったと伝えると、腰を抜かさんばかりに驚きます。それほどできなかったもので、できない生徒の気持ちはわかるし、逆にどうすればできるようになるのかもわかるんです」。

私の授業は慣れるまでは地獄。鬼呼ばわりも日常茶飯事です(笑)

六浦中学校・高等学校で英語の成績が急伸している生徒が続出中。その原動力が英語科の田澤由紀子教諭です。大学卒業後、講師→教諭→進学塾塾長として活躍。特に進学塾『田澤塾』は、「1年間で偏差値を30上げる塾」として大人気に。いつしか受験生だけでなく、もう一度英語を学び直したいと願う社会人も通うようになりまし。しかし、再び学校教諭の道へ戻ることに。その理由をイソップ寓話の『北風と太陽』に例えます。

「私の人生は戦いの連続。それかなり強引に勝ちを取りに行く、正に『北風』。そんな私が六浦の生徒たちの笑顔と出会いました。私にとつて彼らは『太陽』そのもの。『北風』は『太陽』には敵いません。完敗でした」。

生徒たちに真の意味での「実力」をつけ、彼ら自身がそれを客観的に判断できるように、英検、TOEIC、TOEFLといった資格試験の受験機会を増やしました。授業の厳しさも尋常ではなく、「生徒たちから鬼、悪魔呼ばわりされることは日常茶飯事です」と、田澤先生。この厳しさがあって難関国公立クラスの上位クラスでは、ほぼ100%の生徒が最低でも英検2級に合格。TOEICで930点をとる強者も！

そして田澤先生がもうひとつ力を入れていることが「留学」です。「昨年度導入された『海外公立・州立大学指定校推薦制度』は注目的ですが、中学生対象の『国内ミニ留学』や、現地の高校で1学期間学ぶ『オーストラリア・チーム留学』、キャリア直結型の『アメリカ短期研修』も

実施しています。これはワシントン大学をメインの研修会場に、スタンフォード大学やUC Davisなどの名門大学の特別講義も受講できる研修です。更に今年度からは、卒業後の6年生を対象とした、「UC Davis研修」も始まります。

田澤先生が留学に注力するのは、多くの人々が「グローバル人材」英語が話せる人」という誤った認識を持っているから。「英語はあくまでも道具。道具を用いて何をするか、何ができるかが重要です。しかし、本当に大切なのは「人と人とのコミュニケーション」なのです。留学はそれを学ぶより多くの機会を彼らに与えてくれるはずですよ」。

六浦の生徒たちが世界の大舞台で活躍する日も近いかもしれませんね。



Who's Who?

関東学院大学 文学部 教授

金森 強

金森教授の研究室にはキーボードやギターが置いてあります。これらの楽器で英語の歌を作るそうです。「小学校では、歌やゲームを効果的に使った英語の指導法も考えられます。そこで学生時代から趣味で続けてきた音楽活動が実を結びました(笑)。私が手掛けた曲を、元大関のKONISHIKIさんが歌っているんですよ。」



語学力を生かし、社会に役立とうとする意識を芽生えさせたい

昨年4月、関東学院大学文学部英語英米文学科に着任された金森強教授。それまでは愛媛県の松山大学で教鞭を執られてきました。

「私は関東学院大学の出身です。ゼミは、御園和夫先生。英語音声学の第一人者です。私は御園先生の授業を受けたくて、大学3年次にこの大学へと編入してきました。」

金森教授は英語の音声的特徴について調音位置、調音様式の点から研究を行う「英語音声学」から「英語教育」へと専門領域を広げ、これまでに文部科学省の外国語教育政策策定や学習指導要領の作成にも参画しています。

そんな金森教授ですが、今、学生たちをハワイに連れて行く企画を計画しているそうです。

「ハワイ大学と提携をして、午前中は大学で授業を受け、午後は街に出

てボランティア活動をする。現地の人たちと一緒に行動するので、英語によるコミュニケーションは必須です。その体験で、自分が誰かの役に立つ瞬間を感じてもらうことが目的なんです。」

同プログラムは松山大学でも実践されてきたそうですが、参加した学生たちは皆、意識に変容をもたらしたと言います。

「たとえば、老人ホームでお年寄りの手伝いをして、帰りにギュッとハグされる。心からの感謝の言葉、「ありがとう」を渡された時、涙を流す学生もいます。そんな経験がそれまではなかったのかもしれないね。」

また、学童保育の場では日本の文化を英語で教えるのですが、そこでは自分の学んできた英語が通じないという現実に向面します。子どもたちが無邪気に集まってくるのに、自

分の気持ちをやうまく伝えられない。それはとても悔しい体験です。すると日本に帰ってきて、まるで別人のように勉強する。就職活動も一所懸命するんですよ。」

文学部卒業生の就職が厳しいと言われるいまだからこそ、この意識改革のチャンスなるべく早い段階で与えたいと、金森教授は続けます。「語学力を生かし、社会に役立とう」という意識をしっかりと持って、内面を磨くこと。」

それがまさに校訓「人になれ奉仕せよ」の精神につながっているのです。将来、学生たちがグローバル(Global+Local)に活躍する上で必要となる異文化コミュニケーション能力を身につけさせ、コミュニケーションにおける責任感と自己の有用感を持たせる教育こそが重要であると金森教授は捉えています。

ギターとともに過ごし、横浜とともに暮らした日々

六浦小学校から三春台の中学、高校へと進み、関東学院大学経済学部を卒業された加藤好男さん。クラシックギターの手習いがあった加藤さんは、中学の時、あることがきっかけで、その後の学生時代をギターとともに過ごしました。

「今思うと、まさに『進取の気性』っていうんでしょうか。音楽好きの先生から偶然声がかかり、かんらんさいで『おお！キャロル』『聖者の行進』『無情の夢』などをバンド形式で演奏したんです。」

担当は、もちろんギター。もう一人のギター奏者が、後にザ・ゴールデン・カップスを結成したエディ藩さんでした。

「なんせ反響がすごかったんです。そんなことは、当時の中学校ではやりませんかからね。それですっかり味

をしめ、大学を卒業するまでセミプロみたいな活動を続けました。昔はね、エレキギターなんて不良がするものと言われてましたから、加藤さんのところの息子は不良になっちゃった。って後ろ指を差されたものです(笑)。」

大学の授業が終わると横須賀で演奏、そのギヤラを楽器代の返済に充てたそうです。ベトナム戦争の真ん中、どぶ板通りは米兵で溢れ返っていた時代でした。

「大学を卒業してしばらくは、もう少し真面目に勉強すればよかったと反省したのですが、今になって思えばそれも良かったかなと。関東学院に通ったことで、私は横浜を満喫してきたんですね。そのことが今の仕事につながっているのではないかと最近、改めて思うんです。」

大学を卒業された加藤さんは、お父様が昭和23年に創業した実家の捺染(なっせん)工場を継ぎました。世界随一のプリント技術を背景に、当初はインドやスリランカからも毎月大量の注文が入り、民族衣装として着用されるサリーなども手がけてきたそうです。ところが時代の趨勢とともに捺染業の中心はアジア各地域へと移り代わり、やがて自分たちの企画したオリジナル商品で横浜の工場を稼働させようと、考えを新たにしました。

「それが現在の『濱文様(はまもんよう)』です。このブランドは、新しいものの好きな横浜の遊び心や、クスツと笑える面白さを追求しています。横浜の粋を随分と見てきましたからね。それをこれからも表現していきます。」

JOYMAS, WHO'S WHO?

株式会社ケイス 代表取締役 加藤 好男 氏

伝統の捺染技術をベースに、横浜発信の遊び心で現代の和小物を提案する「濱文様」。横浜ではマークイズみなとみらいB4Fに直営店があり、この店舗でしか買うことのできない限定アイテムも展開されています。この「濱文様」は、ご実家の捺染工場を継がれた加藤好男さんが生み出した気鋭のブランドです。



今年目標は学生たちに雄姿を披露すること

関東学院大学 経済学部 准教授 中村友紀

「高校生だった1986年、日比谷野外音楽堂で行われたアントニオ・カルロス・ジョビンのコンサートをテレビで見て、まるで殴られたようなショックを受けたんです。

以来、ボサノヴァをはじめとするブラジル音楽にどっぷり浸かっているという中村友紀准教授。いまはブラジル音楽もポピュラーですが、当時、周囲に聴いている人はおらず、音源を手に入れるのも一苦労だったそうです。

それから14年の月日が流れ、街を歩いていると、とあるビルの2階から聴きなれた音楽がー。

「すぐにビルをチェックしたところ、そこはダンススクールでした。そのまま2階が上がって教室を覗くと、行われていたのがカポエイラだったんです。これは面白そうだと入会を即決しました。」

カポエイラとはブラジル独自の格闘技で、舞踏の要素もあり、さらに音楽をかけながら行われるため、ダンス、格闘技、音楽が混在したものだとか。始めてみる

と、それぞれの型は難しいものの、精緻な動きは求められないためプレッシャーなく楽しめ、しかし運動量は多いので、レッスが終わった後は爽快。そんなカポエイラの魅力にブラジル音楽同様、ハマってしまったそうです。

「カポエイラはブラジルの独自の文化が凝縮したものだと思いますね。文化人類学の見地からもその混沌具合は興味深いものがあります。ただし私はどちらかというと実践派。やっているときは本当に楽しくて、明日への活力源になる。だから離れられないんです」と満面の笑みで実演してくれました。

残念ながら現在は教室に通っていないのですが、「今年は教室を近くで見つきたい。しっかり習って、もっと上手になりたいですね。当面の目標は、私の雄姿を学生たちに見てもらうことかな。」



上の写真はカポエイラ・ウエアで登場してくださった中村先生の雄姿。カポエイラのルールでは白色であれば、どんな服でも正装になるのだそう。「カポエイラは足を使う動きがとて多いですし、合わせるブラジル音楽には他にはないリズムがあります。ほとんどのブラジル人がカポエイラをやりますから、足技と変則的なリズムが身体に染み込んでいる。だから他国の選手にはできない、独特な動きになったのではないかしら」。そう、中村先生はブラジルがサッカー王国になった要因は、カポエイラにあると持論を展開してくださいました。

カポエイラでは楽器も使われます。それが弦楽器のビリンバウ(写真左)、打楽器のアタバキ、タンバリンの一種バンデイロの3種類。愛用のビリンバウは、インターネットで探したそうです。

ディレクタントたち Vol.2

イタリア語の「喜びを見出す人」が語源のディレクタント。学院関係者の知られざる趣味を探るこのコーナー。今回登場するお二人は、海外の文化に精通しているお二人です。

ウクレレの独特な音色に魅せられて

関東学院六浦小学校 校長 石塚 武志



湘南ビーチFMの人気DJ、クマ・マクア氏を父に持つ六浦小学校の石塚武志校長。自慢のウクレレは、幼少時代にお父様直伝で習ったそうです。「この楽器は、音色が特徴的ですね。なぜか子どもたちに近い感じがしますし、実際、ウクレレを弾くとみんな間近まで寄ってくる。きっと弾いてみたくなるんでしょう。サイズも小さく、小学生でも演奏することが可能です。父が当時の私に教えてくれたのも、そんな入り口からだったのではないのでしょうか。」



石塚校長は、いつものやさしい語り口。昨夏、開催された「夏のタベ」ハワイアンタイムのひとコマ(右は石塚校長のお父様、クマ・マクア氏)。「子どもたちが作った学校新聞に『このコーナーができました』と紹介され、今年もまたやらざるを得なくなりました(笑)」。

で話を続けます。「日本で聴くハワイアンは、のんびりとしたリゾートの音楽というイメージがありますが、本来はもう少し古典・土着的なものなんだと父から聞いています。多くの活火山を有するハワイには、音楽によって神々を讃える風習があるんです。フラの踊りも、指先の動き一つひとつに意味があるそうです。振り付けが言葉の代わりになっているんですね。そういう話を聞くと、もっとハワイの文化を知りたいと思いませんか? 私もいつかは実際に足を運んでみたいと思っています。」

一度もハワイに行ったことが無いのに、こんな話をしているものか、と照れながら話をする石塚校長ですが、ウクレレの腕前は子どもたちがよく知っています。昨夏、開催された六浦小学校の「夏のタベ」では、クマ・マクア氏を特別ゲストに、お二人でハワイアンタイムを担当。子どもたちにウクレレの弾き方や、フラの基本を紹介しました。「今、ジェイク・シマブクロさんのよう

な優れた奏者がいますよね。彼の演奏は、たった4本の弦でいろいろ可能性があることを気づかせてくれます。私はコードを弾くことしかできませんが、それでも奥深さを感じますね。」



この撮影のためにお気に入りのアロハシャツを着用して撮影に臨んでくださった石塚校長。手にしているのは、1997年にお父様から譲り受けた大切なウクレレです。「最近、時々ケースから出すくらいですが、指でよく押さえるところは、少し光ってきていますね。ほかにも、もう一本ウクレレを所有しています。ちなみにウクレレとは「跳ねる(tele)、ノミ(uku)」というハワイ語。小さな楽器の上で、指が素早く動く様子を形容しているのかもしれないね。」

関東学院を卒業した国際人 Vol.2



1998年関東学院大学工学部 第二部建設工学科土木系卒業

大原 克彦 氏

オリーブ・スピリットのもと、異国の地で人生を歩んでいる先輩方がいます。大原克彦さんは単身で南スーダンに渡り、JICAの専門家として、人づくり、国づくりの活動に参加しています。

いま、私が暮らしているのは南スーダン共和国アッパーナイル州のマラカルタウンという場所です。南スーダンは25年に亘る内戦期間を経て、2011年によりやく独立した若き国なのですが、長い紛争によってインフラは荒廃し、多くの人材を流出させました。私は「アッパーナイル州マラカルタウン社会経済インフラ総合開発及び緊急支援計画策定プロジェクト」に所属し、人々の暮らしを向上させることを主眼に置いた活動を行なっています。

私をこの仕事に向かわせたきっかけは、毎週通っていた関東学院の教会の英語での礼拝です。そこで国際交流に関心を持ち、海外での活動に興味を持つようになりました。また、アジア地域を対象とした途上国のスラム居住を改善するNGO活動を他大学のメンバーと行なったことは、いままも役立っています。残念ながら、帰国しても多忙で、旧友と会うこともままありませんが、関東学院での日々が自分の自分を形作っていると云えますね。校訓「人になれ奉仕せよ」は、いままも心に残っていますから。



単身、南スーダンで現地の人たちと本格的なインフラ整備にご尽力されている大原さん。ゆえに「職務上の写真はあっても、自分の写真はほとんどありません」とのこと。道路整備も大切なインフラ整備。現地の人たちも多数参加して行われています。地元業者との協力も欠かせません。国や置かれた環境は違っても、子どもの笑顔の愛らしさに違いはありません。「南スーダンの子どもたちはいつも元気いっぱいです」。



海外で活躍しているこのページに登場してくれる卒業生をOLIVE-SPIRITでは募集します! 自薦、他薦を問いません。kouhou@kanto-gakuin.ac.jp までご連絡ください!

Citizen of the World

Committed to nation-building and development of human resources, Kanto Gakuin engineering graduate (1998) Katsuhiko Ohara now lives and works in South Sudan. Part of a planning project for emergency support and infrastructure development for Malakal City in the Upper Nile, Ohara helps rebuild devastated South Sudanese infrastructure and replace human resources drained by long years of conflict. After almost 2 years, countless issues still arise; problems of mutual understanding, prohibitions on travel, night curfews, and shortages of basic supplies, but something as simple as communication with locals at a market recharges Ohara's sense of purpose. Interested in international exchange from a young age, Ohara's days at Kanto Gakuin helped shape him into a problem-solving professional inspired to help reconstruct a nation.

「人になれ 奉仕せよ」を体現する人々

右は在校生、卒業生なら誰もが知っている関東学院の校訓です。現在の教育現場にどのように息づいているのでしょうか。吉田教授に尋ねました。

関東学院大学 人間環境学部 教授 吉田 博



「人間環境学部の教育ビジョンは実学です。マニュアル化されたカリキュラムをただこなすのではなく、実際に体で学ぼう。ですからミャンマーへも教えるべく、現地のプロの方々に対して、用意周到に準備をして、それを伝達していくのです。学生たちは今まで学んできたことをベースにしながら新たな提案をする。それは知識を知識に変える仕事です」と、おだやかな口調で語る吉田教授。

私の研究室では年に一度、学生たちとミャンマーを訪問し、現地で農業指導を行なっています。このプロジェクトは、いまから8年前にミャンマーの農業灌漑省から依頼を受けて始まりました。現地の人々の生活を支える新たな作物を模索するなか、たどり着いたのがシイタケの原木栽培です。シイタケは、乾燥させて輸送することができず。交通網がいまだ整備されていない内陸地域であっても、作物を腐らせずに運ぶことができ

るのです。学生たちは、現地で農林灌漑省、農業大学、農園主の方々に向けてセミナーを開きます。ミャンマーの現地の研究者が参考となる研究内容を、学生たちがパワーポイントを用いて英語で説明するので、訪問地は年度ごとに異なります。訪問地はヤンゴンという熱帯地域を訪れました。最高気温が40℃を超える灼熱の太陽の光が降り注ぐ地域です。

セミナーが終了すると、農業試験場でのフィールドワークに移ります。学生たちがセミナーで説明したノウハウを実際に実践するので、ところが、ミャンマーでは日本の常識が通用しません。電気やガスの供給も不十分で、滅菌室どころかシイタケの菌を培養することさえままならないのです。学生たちは知恵を絞ります。道具がなければ何もできない。のではなく、発想を転換して目的を達成させる。



我々は微生物を扱いますから、その土地に適合したテクノロジー手法を用いなければなりません。セミナーの内容はその都度異なり、年を追うごとに進化しているのです。ミャンマーが終了すると、農業試験場でのフィールドワークに移ります。学生たちがセミナーで説明したノウハウを実際に実践するので、ところが、ミャンマーでは日本の常識が通用しません。電気やガスの供給も不十分で、滅菌室どころかシイタケの菌を培養することさえままならないのです。学生たちは知恵を絞ります。道具がなければ何もできない。のではなく、発想を転換して目的を達成させる。



この経験は、社会に出たときにも非常に役立つと思います。学生たちは現地の人たちと同じ目線で話をします。ミャンマーの人たちと一緒に取り組むことによって、彼らも心を開いてくれるのです。若者同士、メールアドレスを交換して交流する姿も見られます。学生たちには、いろいろな経験をし、多くの困難な課題に立ち向かってほしい。そして自分たちでのり越えるのです。そうすることで新たな気づきが生まれます。ミャンマーへ向かう際、航空運賃などの費用は、それぞれアルバイトをして稼ぎます。身銭を切っているからこそ、生き方に魅力を感じます。先日、学生からこんなことを言われました。「先生、今までは与えられる喜びしか知りませんでした。でも与える喜びはそれ以上に素晴らしいです」と。それは、かけがえない体験です。そのことに学生たちが気づいてくれたことを、私は誇りに思います。これこそが校訓「人になれ 奉仕せよ」を体現していると言えるのではないのでしょうか。この校訓を授業の中で説明

することは決して容易ではありません。発展途上国の現実を知り、世界の現実を知る。それを自分の肌で感じる。それはもう理屈ではありません。自分たちで判断して、自分たちで可能性を広げる。そのパワーを学生たちは持っているのです。

The Joy of Giving

Professor Hiroshi Yoshida, Department of Health and Nutrition, College of Human and Environmental Studies, Kanto Gakuin University

Professor Yoshida visits Myanmar annually with his students to offer agricultural guidance (at the request of the local Ministry of Agriculture) for a new staple crop: a shiitake mushroom easily transported and dried.

Yoshida's students present seminars for local Ministry officials and agricultural experts, then conduct fieldwork at an agricultural station. The biggest task lies in adapting technology to challenging site conditions. Arriving at sites lacking basic power or gas facilities, students learn to achieve their goals by changing their perspectives and methods—a tremendously useful skill in wider society.

This trip gives students, who often work part-time jobs to attend at their own expense, opportunities to learn the unique joy of giving—an irreplaceable experience with the power to open up their potential.

横浜ちよつとといひ話

関東学院大学と横浜ウォーカーとのコラボレーション企画、「横浜」を楽しく学ぶ特別公開講座「横浜学」第3回「横浜のシルク」で、横浜のシルク産業に言及された山崎教授。現在、横浜市工業技術支援センターからの要請を受け、約15万点に上る輸出スカーフの調査に取り組んでいます。

関東学院大学 人間環境学部 教授 山崎 稔恵



山崎教授の専攻は服飾美学。芸術の相における服飾について、その様態や心に映るさまを問題にする学問です。「私は特に、画家ウィリアム・ホガースの作品その周辺の美術や文脈における服飾描写を読むことを通して、18世紀イギリスの芸術と生活文化を研究しています。」

横浜といえば、まずは、港を思い浮かべられることだと思います。半農半漁であった横浜は、1859年6月に港を開くと、ヨーロッパ諸国やアメリカと貿易を始めました。そして、そのときの重要な輸出品が生糸すなわちシルクでした。開港翌年の1860年、総輸出額における生糸の割合は65%、5年後には85%にも伸長しました。

これには理由がありました。一方、横浜は染染技術の水準が高いことで国内外に知られています。近世に浮世絵や草双紙などの普及により確立された印刷の技法を、明治期に入り、薄手羽二重に應用し、木版更紗」を始めたことにあります。1890年に、この技法による手巾が欧米に輸出されると好評を博し、以後、昭和初期にいたるまで全盛を極めたそうです。しかし1923年には関東大震災で、1945年には大空襲で焦土と化した横浜は苦難の道を強いられたことになりました。それが終戦直後、米進駐軍兵士や将官夫ら向けの土

産物として染めた柄ハンカチが評判を呼び、わずか2年後の1947年には、シルクの貿易も再開されたと聞いています。この地には不屈の精神が血脈として流れているのですね。

戦後、世界的な景気回復の波にのって、横浜から膨大な量のスカーフが輸出されました。ところが1980年代、ブラザ合意後の急激な円高で、日本の輸出産業は大きな打撃を受けました。横浜のスカーフ業界もその影響は免れず、華々しい業績をあげてきた会社も相次いで倒産を余儀なくされました。長びく業界の斜陽化の中で現在、家業を引き継ぎ、横浜の

山崎教授が調査しているスカーフのサンプルがこちら。こうしたスカーフがダンボール1箱に1000枚程取られていて、その量は150箱分にもなります。「横浜の輸出スカーフは意匠登録認定制度の施行により、実物サンプルの提出が義務付けられてきました。台帳とともに実物が残っているのは、世界的にも稀有なことで、多種多様な意匠は「時代の証言者」ともいえる魅力を持っています。現在はまだ調査の途中ですが、その成果は追々、横浜シルク博物館等で、企画展として、皆さまにお目にかけたいと思います。」



いつの世も変わらぬテーマ「愛」(戦下)1959年、仕向地は不明(横浜市工業技術支援センター所蔵)



日本企業の世界進出 取扱い説明書/製品カタログ(ソニー)1959年、仕向地は不明(同)



幸福をつかむ吉祥文様(蜘蛛の巣)1957年、仕向地はアメリカ(同)

捺染業の活性化に取り組む若手たちが現れはじめています。彼らのモチベーションは、伝統を絶やしてはならないという強い思い。ただ単に、昔ながらの製法を守っているだけ

では、未来は拓けません。そこでシルク製品を家庭で洗えるように加工したり、消費者に訴える斬新なデザインにするなど、新たな発信のあり方を模索しています。

次の時代を担う若者の志と行動にエールを送り、サポートする。世代を超えた人々が交わることによって、未来が拓けていくように思います。

A Tale of Yokohama

Appointed by the Yokohama Economic Affairs Bureau to study the Yokohama silk industry, Professor Yamazaki presented a public lecture on the topic in collaboration with Yokohama Walker and Kanto Gakuin.

One of Japan's preeminent trading ports, Yokohama long prospered through trade with the USA and European countries. Raw silk (mostly exported via Yokohama, also home to many inimitably skilled silk printers) was Japan's top export for many years. But hit hard by the rising yen in the 1980s, Japan's export industries suffered and many venerable silk producers went bankrupt. The industry went into decline.

However, Yokohama has a long history of rebirth after catastrophe—including earthquake and war—and many young people now seek to revitalize Yokohama's textile industry with innovative design and processing techniques. Professor Yamazaki believes that intergenerational dialogue will lead the way to the future.

関東学院ネットワーク

関東学院の卒業生が経営に携わっているお店へ行ってきました。今回は地ビールと中華、ふたつの“美味しい”をご紹介します。



地元食材の作り手の想いを横浜で暮らす皆様にお届け

驛の食卓

定番ビールは常時5種類(ピルスナー、ヴァイツェン、アルト、インディアペールエール、ラガー。各グラス600円〜)。そのほか期間限定で特殊製法による珍しい地ビールも提供。また40名収容可能な個室は予約もOK。披露宴の二次会や歓送迎会など、あらゆるリクエストに対応しています。
営業時間/11:30~15:00、18:00~23:00(平日) 11:30~23:00(土曜) 11:30~21:00(日・祝日)
定休日/年中無休
神奈川県横浜市中区住吉町6-68-1 横浜関内地所ビル1・2F
Tel.045-641-9901 <http://www.umaya.com>



店内1階に醸造所を持ち、造りたての地ビールを提供する「驛の食卓」。この店舗を采配するオーナーの栗田さんをはじめ、店長の廣瀬さんも関東学院の卒業生です。栗田さん以下、スタッフ総勢で傾注するのが、地元生産者たちとの交流。“地元のビールを地元の食材と共に地元の方々に”をキャッチフレーズに、食材はスタッフが自らクルマを走らせ、直接取引での仕入れを日課としています。生産現場に赴くたびに発見する食材にまつわる逸話の数々。そうしたス

トリーは、メニューに添えられたひとことに留まらず、実際に料理がテーブルへと運ばれる際にもお客様へと伝えられます。「こうした取り組みを支持していただけるのも、地元への誇りを忘れない横浜ならではの気風かもしれないですね。こだわりの農園野菜をはじめ、搾りたての牛乳、養鶏場の新鮮な卵、ハムなどの加工食品やお豆腐、ケチャップや油なども直接お取引をさせていただき、現在では20軒を超えるつながりを持つようになりました。(廣

瀬店長) さて、本命の地ビールですが、オーダーに迷った際は、すっきりとした喉ごしのピルスナーを試してみたいかがでしょうか? 「スタンダードな味から始めて、2杯目以降、いくつかの種類を試されるお客様が多い」と、廣瀬店長。100ml弱のミニグラスで3種類のビールが楽しめるテイスティングセット(780円)がお勧めです。



安心安全な食材で、絶品を仕上げる横浜中華街の広東料理店

均元楼

サクサクもっちりのおこげ料理は、シメの一品として最適。中でもトマトの酸味が効いた「海老トマトソースおこげ」2800円(2~3人分)は、女性の皆さんに大人気とか。また台湾から部材を輸入し、宮大工が仕上げたインテリアは、本場中国さながらの雰囲気。個室予約も可能です。
営業時間/11:30~22:00(ランチメニューは14:30まで)
定休日/年中無休
神奈川県横浜市中区山下町152
Tel.0120-014-128 <http://www.kingenrou.jp>



横浜中華街の数ある名店の中でも、今回お勧めするのが「均元楼」。中華街大通り、善隣門のほど近くに立つ創業60余年の老舗です。オーナー高岡さんのお嬢様をはじめ、多くの関東学院の卒業生がいます。



「皆様にぜひ試していただきたいのが、自家製おこげ。炊きたてのもち米を固め、天日で1週間ほど干したおこげは、既製品と違って歯ざわりがとても軽やか。餡にもよく絡み、

口の中でとろけます」。(総支配人の段さん) サクとした食感の中に広がるもち米のほのかな甘味と、濃厚な餡が奏でるハーモニーは、まさに絶品。通常はアラカルトメニューからのオーダーとなりますが、リクエストでコースメニューに組み込むことも可能です。また、均元楼では化学調味料は一切使わず、食材も地元産にこだわります。「春先には三浦で採れた菜の花の炒め物が人気」と、段さん。塩だけでも10種類を使い分け、繊細な味わいを引き出します。味の良さはもちろん、食材の安全性にも十分配

慮した品々は、まさに横浜中華街ならではの真骨頂と言えます。 さらに、ランチメニューの一番人気を聞くと、「麻婆豆腐ですね。自家製豆板醤に赤唐辛子を加え、花山椒を効かせたスパイシーな麻婆豆腐が当店の特徴です」。ランチ定食840円という価格設定は、メインストリートにある店舗では破格の安さ。こうした利用のしやすさも、地元で愛され続ける秘訣ですね。

広報課から

本誌「OLIVE SPIRIT」は、関東学院に在籍している園児、児童、生徒、学生、保護者の方々、卒業生、教職員が、何を考え、どう行動し、何を想い、どのように社会や地域と関わって生きているかを、インタビューを中心に取材し、取り上げていく、ステーキホルダーの方々へ向けた冊子です。

本学院の校訓「人になれ 奉仕せよ」に触れ、「関東学院」で育った人たちの具体的な活動や、生の声を通して、創立以来、脈々と流れ続けている「関東学院らしさ」を

伝え、受け継いでいきたいと考えています。「OLIVE SPIRIT」は、ステーキホルダーの皆さまと一緒に作り上げていく冊子です。関東学院の精神をもって、社会で活躍されている卒業生の方、魅力的な活動をしているステーキホルダーの方がいらっしゃいましたら、お気軽に広報課へ情報をお寄せください。 関東学院 広報課：(045)786-7006 / kouhou@kanto-gakuin.ac.jp

神様の愛を知り、「祈る」ことを学び、自分や隣人を愛することができる子に。

関東学院創立125周年の誓約に「私たちは在籍する児童を神から託された存在として、その存在を根底から信頼し、励まし支援し、神に愛され守られている一人として、育むことをあきらめない」とあります。神様がどのような役割を児童に与えられているのかに信頼し教育にあたる」と教職員で話しています。



関東学院六浦小学校 校長 石塚武志

学校生活では、教会暦や行事に合わせた礼拝や聖句の暗唱を行なっています。これらを通して児童は「祈る」ことを学びます。キリスト教で祈る相手は、一人の神様です。そして、神様はどんな時も愛し続けて下さることを知らされず、神様が愛して下さる自分を知った時、隣人を愛し、隣人のために祈ることが出来ます。これは、「人になれ

子どもたちには、聖書の御言葉をたくさん覚えてもらいたい。聖書の御言葉は、ある時に聞くとただの言葉ですが、ある場面で聴くと意味を持って響いてきます。それは、主イエスご自身が命の言葉だからです。歴史を見ても、多くの人が聖書の御言葉に希望を見出しています。 そんな聖書の御言葉と讃美歌を取り混ぜて関東学院の歴史を描く音楽劇をやってみました。学年ごとにパートを担当して表現できたらおもしろいと思います。

自分も、お友だちも、それぞれが大切に特別な存在だと認められる子どもに。

この園が一番大切にしていることは、誰もが愛されるために生まれてきたことを知り、自分の存在価値を自分で認められる子になってほしいということ。一人ひとりが大切な存在だということを、保育の中でさまざまな形で伝えていきます。しかし、自分のことだけが大切では困ります。聖書に「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉がありますが、「自分と同じように」というところが大切なことです。「一人ひとり特別な」との想いで私たちは保育にあたっています。どの様な生きにくさがかかっていたとしても、誰もが特別な存在であり、園での生活も一人ひとりに寄り添うようにしています。



関東学院のびのびのば保育園 園長 小高千恵

子どもたちには、どのような状況の中でも楽しむ力となやかに生きていく力を身に付けてほしいです。悩みや苦しみがあっても、気持ちを柔軟にもち、他者と連帯・協力できる人に育ってほしいと願っています。

のびのびのば園は、この地域ですでに38年、多くの方々を支えられながら保育を行っています。その実績があつて認定こども園になりました。グローバル化の時代、野庭地域も世界の縮図のようになってきました。子どもの育つ環境も多様化してきています。国籍・民俗・宗教・家庭環境・障がいや病気の有無を問わず、地域の方との出会いも増えました。 この園が地域の子育てや児童福祉の拠点の一つとして、頼られる存在となれるよう、仕えることが私たちの使命であり喜びです。

神様に祈りを捧げるなかで子どもたちに育まれていく。

こども園でのキリスト教保育の根底にあるものは、先生方の「祈り」です。朝、保育を始める前に教職員で讃美歌を歌い、聖書の御言葉を読んでいます。子どもたちのこと、今日一日のことを祈ってスタートします。私たちは、無垢な子どもたちに触れる仕事ですが、私たち自身は完璧な人間ではないので、「足りないところを補ってください」、そして「神様が子どもたち一人ひとりを成長させてください」と祈らずにはいられません。神様を畏れ敬い、感謝の祈りを捧げる中で子どもたちが育まれていく、それがキリスト教保育ではないかと考えています。



関東学院六浦こども園 園長 根津美英子

では、神様への祈りや感謝の気持ちをどう子どもたちの中に育んでいくのかですが、先生方が祈り、小さなことに

も恵みを覚えて感謝する、その姿勢を通して、自然に子どもたちへも伝わっていくのだと思います。神様はいつも一緒にいてくださるということを伝えたいと考えています。そして、祈ることだけでなく、見えないものを信じる大切な力や心を育み、愛されていること、大切にされていることを実感してほしいと思っています。 今は、保育園がスタートしたばかりなので0〜2歳の保育を3〜5歳にどうつなげていくかが課題です。また卒業後、キリスト教の環境から離れてしまうお子さんもおられるので、教会とぜひつながってほしいと願っています。親御さんたちの理解を深め、教会との連携を進めていきたいと考えています。